

『金瓶梅詞話』に表された明代女性の頭部装身具に関して

張 紅琳

はじめに

今日の中国前近代服飾研究には、文献史料として、ほぼ正史、会要、典章会典、文学、類書、筆記などに記載されているものが用いられ、出土文物を史料とする場合には、皇室や官僚の墳墓の副葬品に対象を限定しているというのが現状である。一方、日本では、上記のものにかぎらず、詩や小説に書かれたものまで、網羅的に研究対象としている。しかし、現実の生活を活写した市井小説は、他の資料に比べて、実社会そのものを反映しており重要な服飾研究資料として利用できるものと思われる。明代の代表的市井小説で、あらゆる階層の人物が登場する『金瓶梅詞話』を研究対象としたのは、こうした観点からである。なお、上記の資料のほか、元代に誕生した芸能の一種である雜劇の脚本、地方に伝わる人物像、および出土文物をも参照し、小説に登場する各々の女性の生活環境や社会地位の変化が、頭部装身具の変化からも看取できることを明らかにしたい。小論では『金瓶梅詞話』に表された明代女性たちの髪型とその髪飾りを中心として論じる。

なお、小論は諸本の中で、一六一〇年初版の『金瓶梅詞話』の影印本（大安書店 一九六三年版、以下『金瓶梅』と簡称する）に基づいて論述する。小論の表記法は、まず文中の装身具の素材、形状と色彩を描いた部分を抽出して詳しく説明を加え、後の（ ）内に、原文の服飾名称を示した。その名称を含む引用文には日本語訳を付け、原文は註に示した。

一 頭部装身具

装身具の中で、頭部装身具は、髪飾り（男性は帽子も含む）、耳飾り、首飾りを指し、また、結い上げたマゲの形は、そのマゲに合う髪飾りにも影響を与えることから、ここでは髪形も頭部装身具の範囲に入れた。

明初、女性の髪形は宋代とほぼ同様であったが、世宗の嘉靖年間（一五二一～一五六六）から、変化が多くなつたと見られる⁽¹⁾。それから、『金瓶梅』が成立したとされる万曆中期（一五七三～一六二〇）までは、五十年も経っていた。国家政治の安定や手工業の発達に従って、明代女性の装身具の製作技巧は前より更に精密で、優れたものとなった。唐宋からの伝統技術だけではなく、同時にまた西域から入ってきた象嵌金細工技術も発達していた。加えて、この頃になると、女性のファッションの変化は速く、種類も豊かになった。そして製作技術に対してはたゆまず改善しようとする意欲が、以下の史料にも見える。

南京女性の服飾は、三十年前（即ち嘉靖、隆慶年間）まで、ほぼ十余年間に一度の変化であったようだ。万曆から後、二、三年が過ぎないうちに、マゲの大きさや高さ、袖の幅や長さ、花釦の型や染付け、鬢や髪飾り、髪留め方、靴の巧みな作り方には、すべて新しい変化が生まれた。すでに流行している時に、（流行に乗り遅

れた・筆者補足) 民衆がこれを美しいと思つて、流行しているものを皆身に付けても、流行に敏感な人は口を覆つて笑わない人はいない。⁽³⁾ (『客座贅語』⁽⁴⁾ 卷九服飾)

『客座贅語』は万曆四十五年(一六一七)に顧起元(一五六五—一六二八)によつて編纂、翌年に発刊された。顧は江寧(南京)出身であるから、南京の服飾を自ら見ていたのである。『金瓶梅』もこの頃に成立したと言われ、『客座贅語』の写實的筆法により、『金瓶梅』に描かれた装身具と対照することで当時の服飾を確定することができる。そして髪型に関しては、『客座贅語』、『金瓶梅』双方ともに「○○髻」という言葉で髪型のマゲのことを指しているのである。

二 『金瓶梅』に表わされた女性達のマゲの形

史書によると女性は、十五歳から髪を結び上げて、簪でマゲを固定する「笄礼」⁽⁵⁾と呼ばれる儀式を行なつた。勿論明代に入つても行われ、このような儀式が連綿と絶えずに続いていたのである。ここでは、『金瓶梅』に描かれた女性達のマゲの形は、

一 「一窩絲杭州攢」^(イッカシコウシュウセシ)、二 「挑鳳髻」^{チョウフウケイ}と「宝髻」^{ホウケイ}、三 「雲絲銀髻」^{ウンシギンケイ}と「銀絲雲髻」^{ギンシウンケイ}という三つのタイプに分けられる。これらのマゲ型がどのようなものであったのが見ていきたい。また、例に取り上げた該当小説の登場人物らの間柄は、以下のものである。

○西門慶の家族

一 呉月娘は、正妻

二 孟玉楼は、三番目の妾

- 三 潘金蓮は、五番目の妾
- 四 李瓶児は、六番目の妾
- 五 春梅は、潘金蓮の下女で、後に周秀の妾
- 六 如意は、西門慶と李瓶児の長男の乳母

②西門慶の交際相手の遊女

- 一 李貴姐は、李家の遊女
- 二 鄭愛香は、鄭家の遊女
- 三 鄭愛月は、鄭家の遊女
- 四 呉銀児は、呉家の遊女

③西門慶の商売を手伝う人の家族

- 一 宋惠蓮は、鄭来旺の妻
- 二 王六児は、韓道国の妻
- 三 賁四娘子は、賁地傳の娘であり、後に夏延齡の妾

④皇室の間柄

- 一 喬五太太は、世襲指揮使喬五の正夫人であり、また東宮貴妃の伯母であり、のち彼女の娘である喬長姉は西門慶の長男である官哥と婚約した。

- 二 藍氏は、内府御前の生活を管理する宦官であり藍宦官の姪である。のち、内府御前の人を管理する何宦官の甥と結婚した。

⑤その他、文嫂児は媒酌人

二・一 イッカシシコワシユワセシ 一窩絲杭州攢

「一窩絲杭州攢」は、明代女性のマゲ形の一つである。⁽⁶⁾「攢」(cuàn)はもともと「集める」という意味である。

つまり自毛を頭の後ろに纏いつけて一束とし、円を描くように結いあげた髪型である。このようなマゲは、短時間ですることができ、付け髪もいらぬのが特徴である。自分の髪を結い上げるとき、自然に形ができてこそ、杭州の遊女たちの遊び心とセンスを表現できる。更に「杭州攢」と名づけたのは、最初杭州の遊女たちがこのマゲの形を作り上げたからだと思われる。『金瓶梅』の中では、西門慶と関わる遊女たちしか「一窩絲杭州攢」をしていない。しかしながら『金瓶梅』の中で、いつもファッションに大胆な潘金蓮は一回だけこのマゲにしたことがある。以下は『金瓶梅』の中に描かれた「一窩絲杭州攢」についての描写である。

・李貴姐（十五、第十五回の省略である。以下同様）「：普段のままの束ね髪に、杭州産のマゲ用ネットで後ろにまとめ、金の簪や、翡翠で作った梅の花模様のついた小さい髪留めを髪にとめたり、真珠で飾ったカチューシャを頭にはめて…」

・潘金蓮（二七）「：後ろに杭州産の雲の模様の翡翠が付いたマゲ用ネットでマゲを包んだりした…」

・鄭愛月（五九）「：鬢髻を被せずに、杭州産のマゲ用ネットで包んであり…」

・鄭愛月・鄭愛香（六八）「：頭にラッコの毛皮の抹額をつけ、マゲに杭州産の梅の模様の翡翠が付いたマゲ用ネットでマゲを包んだりした…」

・鄭愛月（七七）「：頭に束ねた髪を杭州産のマゲ用ネットで包んで、翡翠の梅の花模様の髪留めや、金めっきの簪や櫛をつけて、ラッコの毛皮の抹額を巻いている…」

以上五ヶ所しか書かれていない「一窩絲杭州攢」の髪型は、金の簪（金累絲釵）を付けたり、翡翠で作った梅の花模様のついた小さい髪留め（翠梅花鈿兒）を髪に貼りつけたり、真珠で飾ったカチューシャ（珠子箍兒）を頭に巻きつけたり、雲の模様の翡翠が付いたマゲ用ネット（翠雲子網兒）でマゲを包んだりした。そして冬の場

合は更に、ラッコの毛皮で作った抹額（海獺臥兎兒）と一緒に組み合わせ使った。以上から、明代では、「一窩絲杭州攢」というシンプルな髪型が杭州の遊女に愛されて、それが余所までも伝わって流行していることを知り得るのである。

二・二 挑鳳髻と宝髻

一つの髪型を作るために、必ず付け髪を用いてマゲ型を変化させるのは、「挑鳳髻」と「宝髻」である。勿論明代には、まだ他のマゲ型があるが、ここでは『金瓶梅』に描かれたマゲ型を中心に見てみたい。ところで、明代のマゲ型に関しては、『客座贅語』巻四女飾に記述されているものと照合してみると、以下のようである。

いま、南京女性の装身具は…Y髻（あげまきマゲ）もあって、雲髻もある。俗は「仮マゲ」とも言う。その形は漢や晋の「大手髻」に始まる。鄭玄（一一七〜二〇〇）がいう「假紒」や、唐の人のいう「義髻」のことである。

「挑鳳髻」と「宝髻」の「髻」は、現代における付けマゲである。つまり、人の髪や馬の尾の毛を素材として、形を整えた付けマゲであろう。そして『金瓶梅』では以下のように描写している。

・ 李瓶兒（二〇〇）「…真珠をくわえた鳳凰の簪を二本マゲに挿し…」
 ・ 吳月娘（四三三）「…頭に真珠や寶石を満遍なくつけていて…」

李瓶兒はもともと「広南鎮守」の息子の嫁の身分だった。第二十回は、彼女が西門慶の愛妾として西門家へ入る日である。ここの「挑鳳髻」は彼女の身分と相応しい晴れ着に合わせたマゲ形だと思われる。そして、第四十三回に描写された吳月娘の宝石や真珠がついた「宝髻」は晴れ着とともにあげられたのである。吳月娘は官僚と

なった(第三十回に「金吾偉副千戸」)西門慶の正妻として、西門慶と李瓶児の間に生まれた官哥は、喬五太太の娘である喬長姉と姻戚関係になったのである。すなわち皇帝の親戚である喬五太太と、親戚関係を結ぶようになった盛大な日に、外命婦の礼服と合わせて、付けたマゲ形だとみなせる。以上のような二つの場面から、付け髪を使って、豪華なマゲの形を整えるのは、晴れ姿と正式な場面でのみなされたことがわかる。また、「挑鳳髻」と「宝髻」のようなマゲ形は、ある程度の社会地位に就いた女性でないと、付けられないマゲ形であることがわかるのである。

二・三 ウシシギシケイ
雲絲銀髻と銀絲雲髻

・春梅(二九)「…頭に銀メッキのマゲをつけていて…」、「…普段のままの束ね髪に銀メッキのマゲをつけていて…」

明代の既婚女性は必ず髻髻をつけ、それに対して未婚女性は代わりに自毛で「髻」を結い上げるのが習わしであった。春梅は未婚女性で、また潘金蓮の下女として、自毛のマゲを結い上げ、銀メッキの付けマゲ(銀絲雲髻、雲絲銀髻)をかぶっている。にもかかわらず、道士呉神仙は彼女の人相を見て、「必ず冠を被る」(必戴珠冠)と断言した(後述)。『金瓶梅』の春梅に対する描写から、道士が彼女を見て、将来の出世を予言した。女性のマゲ形と髪飾りの変化は、その女性の運命的な変化も表現でき、その女性の社会地位も表わせることがわかるのである。

『金瓶梅』における、人物描写は単に外見からだけではなく、その一つ一つの言葉から、その人物の個性も生き生きとして描写されている。まず潘金蓮には西門慶の好みながら、遊女の風情を真似し、「一窩絲杭州攢」

にさせている。「一窩絲杭州攢」とは、とにかく男性の気を惹き、愛されるように結い上げたマゲ形であると思われる。

李瓶児には西門慶との結婚の日に、その年齢と、もと高級官僚の嫁であった地位に相応しい「挑鳳髻」を結わせ、正妻呉月娘には、夫西門慶もすでに官僚となつて、また皇室の親戚と縁を結ぶようになったので、その高貴な身分を表わせるようにと「宝髻」にしている。「挑鳳髻」と「宝髻」は、社会的地位が高い貴婦人が晴れ着と合わせるときに用いる付け髪で、派手な形にしたマゲ型である。最後に、春梅は潘金蓮に一番愛された下女として、簡単でまた清楚な姿を表わす「雲絲銀髻」にした。「雲絲銀髻」は、未婚で富貴な屋敷で働く下女のマゲ形である。以上のような三つのマゲ形は、『金瓶梅』の中でいずれも特定の身分に属す女性たちのマゲ形であることが判明するのである。

三 『金瓶梅』に表わされた髻髻

三・一 髻髻デキケイとは

「髻」は、形声文字である。つまり上部にある「髟」の字は髪のことを指すが、下部にある「狄」デキ (𠂔) は文字の発音を表わしている。また「髻」、「髻」、「髻」とも書くが、現代では滅多に使われない漢字である。ちなみに声部である「狄」は、春秋以前北方地方で遊牧していた少数民族を指し、また最下位の官吏も指す。「狄」はここで「髟」の字と合わせて「髻」の字で、またマゲを意味する「髻」の字と組んで、一つのマゲ型の名称となっている。

「髻髻」という言葉が、初めて文字で記録されたのは元代の芝居（雜劇）の劇作家関漢卿（約一二二五～一三〇〇）作『感天動地竇娥冤』の中で、登場人物である老婦人蔡婆婆の白いマゲを「霜雪般白髻髻」と描写している。また、王実甫（約一二六〇～一三三六）作『西廂記』の中で、登場人物である張生が鶯鶯のマゲを見たときに、「雲鬢鬢佛墜金釵、偏宜髻髻児歪」と形容した。さらに、賈仲名（一三四三～一四二三）作『荆楚臣重対玉梳記』の登場人物で、遊女の顧玉香は自分を「油髻髻太歳」と表現し、『錦雲堂暗定連環計』にも、登場人物王允が貂蟬のことを歌った「油掠的髻髻児光」との表現もある。以上の表現から、元の時代において髻髻は一つのマゲ形であり、そのマゲ自身を表わす言葉であることがわかるのである。¹⁰⁾

『明史』（中華書局 一九七四）卷六十七・志第四十三・輿服三では、以下のように記す。

宮中の女性演奏家の冠服は、洪武三年（一三七〇）に制定された。凡そ宮中の女性の宮中楽団の人、車の世話もする女性たちは、冠服の色と同じ色の髻髻を付ける。¹¹⁾

ここでの髻髻は明初において宮廷の中で音楽を演奏する女性たちの、マゲの上に布製のものを被せて、そしてその布も含め、でき上がったマゲ形を指す。

以上の史料から、髻髻という言葉が、『金瓶梅』が出版される前に存在していたことは明らかである。しかし、髻髻の形については、最初の元雜劇の中に表れたマゲ型から変化して、『明史』にあるように服の色と一致する色の生地に含まれた「本色髻髻」のマゲ型になった。また、「狄」の含意から見ると、下層社会の庶民のマゲ型と思われる。しかし髻髻が、戦乱期の元末において、一般大衆の間で民族を問わず、作りやすい素朴なマゲ形が流行っていくのは当然のことであつたらう。ファッションの趨勢で、初期には便利さを求めるが、次第に美しさを求めてゆく流れはいつの時代でも共通している現象である。髻髻でも、本来のままであるマゲの形から生地

で包み、それが宮廷にも影響を与えて、品があり、しかも社会的地位が低い宮廷女性演奏家から始まり、着用を命じられるようになった。とはいえ、生地に包まれた髻の形が再び一般大衆の間に広がるのは、まだまだ先のことである。

明代の文学作品において、最初に髻髻という言葉が記録されたのは、呉承恩撰『西遊記¹²』である。『西遊記』は周知の通り、神魔小説であるから、その中に登場する主要人物は、三蔵法師以外みな妖怪か仙人である。第二十三回で言及している、「時様髻髻皂紗漫」の老婦人も仙人から化けた人物である。彼女のマゲの形は、物語を描いていた時代に流行っていた（時様）黒い紗（皂紗）を被らせたマゲ形である。

また、明代の演劇服飾史料で、趙琦美撰の『脈望館抄校本古今雜劇』を編集した王季烈校の『弧本元明雜劇¹³』では、百二種の演目の末尾に「穿関¹⁴」という項目を付している。そこでも、「髻髻」、「髻髻手帕」、「髻髻頭面」に言及しているので、表一にまとめた。

『弧本元明雜劇』の「穿関」の中に表わされた髻髻は、登場人物の身分に応じて使われ、さらにその種類も増えていたことが明確にわかる。その中に、描かれた普通のマゲ形である髻髻は変わらずに魔女に使われている。マゲをハンカチで包んだ「髻髻手帕」は、『西遊記』に登場したような貴婦人か、媒酌人に使われている。マゲ形に被せるハンカチには特定の形があり、さらに髪飾りと組み合わせた「髻髻頭面¹⁵」と言う言葉が初めて使われ、しかも伝奇的な美女や若い女性に使われていることが判明する。ここで、漸く若い女性用の髻髻を付けるようになったことが表現されているのである。

「穿関」に記録されているものは、役者がある人物に扮装するとき、規定された装身具を含め、舞台衣装、被り物、履物や道具の総称である。それによって、各々役者が手にとって、ある登場人物を再現することができる。

		種類	登場人物	劇名・場(折)番	年代・作者	年代・版本
髻髻手帕		天魔女、地魔女、色魔女、運魔女	『鎖魔鏡』・第一折	元・未詳	①明・刻本 ②明・手写本	
髻髻頭面		媒婆	『破窯記』・第三折	元・未詳	明・手写本	
		旦兒	『裴度還帶』・第一折	元	明・手写本	
		捺旦	『智勇定齊』・第一折	元・鄭德輝	明・手写本	
		媒婆	『劉弘嫁婢』・第二折	元・未詳	明・手写本	
		旦兒	『鬧銅臺』・第一折	未詳・未詳	明・手写本	
		大旦・捺旦	『九宮八卦陣』	未詳・未詳	明・手写本	
		虞姬	『衣錦還鄉』・第二折	未詳・未詳	明・手写本	
		旦兒	『龍門隱秀』・第三折	未詳・未詳	明・手写本	
		劉月娥	『破窯記』・第四折	元・未詳	明・手写本	
		正旦無鹽女	『智勇定齊』・第二折	元・鄭德輝	明・手写本	
		蘭孫	『劉弘嫁婢』・第四折	元・未詳	明・手写本	
		小喬	『娶小喬』・第四折	未詳・未詳	明・手写本	
		貂蟬	『單刀劈四寇』・楔子	未詳・未詳	明・手写本	
		大旦	『九宮八卦陣』	未詳・未詳	明・手写本	

表一・『弧本元明雜戲』・「髻髻」に関する演目とその表現

つまり、その中で表現された髻髻の形は、登場する女性の年齢や社会的地位に関らず、その人物の品格（正角、反角）を決めているのである。

一方、元の雑劇は元末から明代にかけて、町の隅々に広まり、役者が扮する若い女性の役をモデルとして、町の女性もこれを見て、自分のファッションとして取り入れている。それは、『客座贅語』巻四女飾で、

いま、南京女性の頭につける飾りでは、…その普段着に合わせてマゲに被せるのは、金や銀の糸、或いは馬の尾の毛、或いは紗で作った帽子のようなものを被っている。¹⁶⁾

と書かれており、ここから、髻髻は前代のようなただのマゲ形ではなく、自分の髪に付ける仮マゲに変化してきたことがわかる。また、その作り方や素材について、『客座贅語』巻四女飾は以下のように記述している。

いま、南京女性の後頭部につける飾りは、針金を織り上げた半球の網の外側を仮髪で覆う。マゲの半分の高さのところ、マゲの上に被せて、簪とめる。名づけて「鼓」という。¹⁷⁾

そして『金瓶梅』第三十八回では、潘金蓮は寂しく西門慶を待っている間に、寝たくをしようとした場面では、「仕方なく冠を外して」（不免除去冠児）のように描写しているが、潘金蓮の家庭的背景や社会地位から見ても、ここの冠は礼服に合わせる冠ではないはずである。つまり、当時において髻髻とはマゲに被せる被り物の一種となっていて、マゲを固定する小道具であろう。女性が結い上げたマゲは髻髻を被せることによって、マゲの形が崩れにくくなっただけでなく、更に髻髻に髪を飾る簪や花鈿など髪飾りを固定することによって、髪からずれないように留める工夫もされたのである。

三・二 『金瓶梅』の中に表わされた髻髻

以上の資料から、『金瓶梅』の中で描写された髻髻が、いかなるものか具体的に理解しやすくなったであろう。更に、以下のように『金瓶梅』の中で描かれた髻髻も、各々様々な素材で作られていることがわかるのである。

『金瓶梅』の中に描かれている髻髻とは、髪の毛、銀、紵麻や縐紗の素材を用いて作った、「頭髮髻髻」、「銀絲髻髻」、「白紵布髻髻」、「白縐紗髻髻」と数種あった。これらの髻髻の素材や、それを固定する簪の素材と模様は、これを装着する女性の社会地位や、経済的状況を示す象徴でもあった。さらにその被り物の形式にも「時樣扭心」のスタイルがあった(後述)。一例を挙げると、それらはいずれもある素材を用いて匠みの手を加え、下は大きい円で、上が尖った円錐体の被りものであった。そしてそれを自毛で結い上げたマゲの中に入れて、簪で固定したものであると思われる。髻髻は挑鳳髻、宝髻と比べると、はるかに貴重であつておしゃれであることがわかる。それ故に、小論では髻髻を髪飾りの枠に入れたわけである。以下、『金瓶梅』に描かれた髻髻の素材やスタイルを、四種類に分けてみてよう。

三・二・一 頭髮髻髻トウヘツチケイ

『金瓶梅』中、「頭髮髻髻」については、以下の一カ所にしか表わされていない。

・潘金蓮(二)「…頭に黒い髪の毛をかぶつて、その周りに金を塗った革のふちで飾っている…周りに小さい簪を綺麗に挿して、鬢には二輪の花を斜めから挿して、排草の模様がある櫛で後ろを整え…」

この描写から見ると、潘金蓮がまだ西門慶と会う以前には、平民の生活を送っていたことがわかる。彼女は小説に描かれた登場人物の中では、ファッショリーダーと言えるが、しかしこの場面では、彼女は街で焼餅シヤオピン(中国北方地域の食品。小麦粉を発酵させた生地を炭釜にいれ、天火で焼き上げたたて丸いナンのようなもの)を売

る武太郎の妻であつて、明代の風習に従えば、彼女は鬢髻を付けているが、しかしそれは安い髪の素材で作った「頭髪鬢髻」である。明代では、仮に金銭面で余裕があれば「銀絲鬢髻」を付けるのが普通であろう。そして彼女はその安い「頭髪鬢髻」の縁に、羊の皮に金箔を伸ばした端切れをぐるりと巻き付け、その周りに小さな簪をいっぱい挿している。そして片側の鬢髪に、夫婦が睦まじい仲である喩えとするペアーの花を斜めに挿している。さらに香料として使われる排草（薬草の一種）の模様がある櫛でマゲの後ろを固定している。この排草は、西門慶の誕生日のときに、潘金蓮が彼に送ったプレゼントの胸当の中に入れられたものである。その胸当の中に排草や薔薇の香料を入れたこと¹⁸によって、香料から発散した強い匂いは、彼女が強い印象を与えようとする独特の思慮であらう。

三・二・二 白^{ハク}紗^{チヨウ}布^{ウラ}鬢髻^{テキケイ}・白^{ハク}縷^{スウ}紗^{シヤ}鬢髻^{テキケイ}

『金瓶梅』の中に「白紗布鬢髻」に対する描写も次の一カ所しかない。それは、李瓶児が元の夫の喪に服している期間のことである。

・李瓶児（十四）「…白い紵麻の鬢髻をかぶって、真珠のカチューシャで固定して…」

「白紗布鬢髻」は、即ち白い紵麻で織った生地（白紵布）で付けマゲを巻いて包んだ鬢髻であろう。李瓶児の高貴な身分と相応しくするために、真珠で作られたカチューシャ（珠子箍児）でマゲを固定していた。

また夏になると、白い絹クレープの生地（白縷紗）を使って鬢髻を巻いて包み、雲のように薄く白い生地です、清々しくて夏らしい「白縷紗鬢髻」マゲの型へ変化させたことがわかる。『金瓶梅』は以下のように描写している。

・吳銀兒（六八）「…頭に白い縮緬の紗の鬢髻をつけていて、真珠のカチューシャを固定していた。翡翠の雲の模様がある髪留めをつけて、周りには小さい簪を並べて挿している…」

・金蓮・玉樓ら五人（七五）「…皆は白い鬚髻に真珠のカチューシャを固定していて、それに金糸入りの翠藍色のハンカチを被せていて、さらに真珠や翡翠の飾りをいっぱいつけている…」

若い娘である呉銀児と金蓮・玉樓らは、白いマゲを付けていても、どれも真珠のカチューシャ（珠子箍兒）で髪を留めている。呉銀児は玉で作った雲の模様がある髪留め（翠雲鈿兒）と小さい簪をつけている。金蓮・玉樓ら五人は金糸を織り込んだ青い綾の生地で作ったハンカチ（翠藍銷金綾汗巾兒）を、鬚髻の上に被せて、そしてまた彩りの飾りとあわせて付けたことがわかる。

三・二・三 銀絲鬚髻、金絲鬚髻

『金瓶梅』の中では、「銀絲鬚髻」に対する描写が最も多い。以下、小説の章回数順の順番にしたがって、「銀絲鬚髻」についての描写を列挙して明らかにしたい。

・潘金蓮・玉樓（十一）「…二人とも普段のままに銀の鬚髻を被って、鬢に飾り物はしていない…」

・李瓶児（十三）「…夏なのに銀の鬚髻を被って…」

・呉月娘（十四）「…頭に鬚髻を被らせて、テンの抹額を巻いている…」

・潘金蓮（十九）「…頭に銀の鬚髻を被らせて、後に象嵌した蟾宮折桂（ヒキガエルは郷試に合格するなど縁起をもたらす象徴とされている）の模様がある玉の簪や、翡翠の梅模様がある髪留めを挿して、鬢にはたくさん

の簪を挿している…」

・李瓶児（二十）「…また一つ金の鬚髻を取り出すと、九両の重さがあり…」

・潘金蓮（二八）「…銀の鬚髻を被らせて…その中にいっぱい薔薇の花弁を入れて、鬢には飾りをつけない…」

・李桂姐（三二）「…頭に銀の鬚髻を被らせて、その周りを金で飾った簪や櫛を挿し、また満遍なく真珠と翡翠

を飾っている……」

・ 王六兒（五十）「……銀の鬚髻を被らせて、金で飾った簪や櫛や、翡翠の髪留めを挿してある……」

・ 李桂姐（五二）「……銀の鬚髻を被せて、翡翠の流水や瑞雲の模様がある髪留めや、金で飾った簪をつけている……」

・ 鄭愛香（五九）「……頭に銀の鬚髻を被せて、梅の花模様の髪留めをつけ……」

・ 王六兒（六一）「……頭に銀の鬚髻を被せて、翠藍の縮緬の紗と金を塗った羊皮のへりを付けているカチューシャをはめて、その周りに小さいな髪留めを挿している……」

・ 賁四娘子（七七）「……頭に金を塗った翠藍のカチューシャをはめて、鬚髻に金の簪を四本挿している……」

・ 吳月娘（七八）「……ただ鬚髻を被っていて、金の簪を六本挿して、真珠のカチューシャをはめている……」

・ 孟玉樓・潘金蓮（七八）「……いずれはラッコの革の抹額をしめ……頭に皆鬚髻を被らせている……」

『金瓶梅』の中で、女性の髪飾りとして一番多く描写されているのが「銀絲鬚髻」である。「銀絲鬚髻」をする登場人物の身分の確定と、その登場人物がたどった生活環境の変化を暗示していて、あわせて転換する社会的階級も表示しているようである。

それはまず、第二回での潘金蓮はまだ平民である武大郎の妻として、「黒油油頭髪鬚髻」しか持っていなかったが、しかし彼女が西門慶の愛妾となって（第十一回）からは、平日に玉樓と家において将棋をするにもかかわらず、「銀絲鬚髻」を被せている点からもわかる。これは彼女が前より裕福な生活を送っている証であろう。

また、李瓶児はもともと高官の妻であった。小説中でいえば、西門慶に関する女性の中で社会的地位が一番上の人間であったが、彼の愛妾となった第二十回では、社会身分も降格し、前のように正妻ではなくなったので、重

さ約四〇〇グラム（重九兩）の「金絲髻髻」を西門慶に渡して、職人の所に持って行かせた。一つは九つの鳳凰が合わさったもので、各口に真珠の小連珠を銜えている簪（塾根兒）一本と、もう一つは髻髻が結い上がったマゲに、動かないように下から上に支えて、正面から固定する簪（分心）一本を注文した。

以上、髻髻の素材の変化から、小説中に登場した女性の運命の変化も覗かれるであろう。第二十五回の中に、西門慶の使用人である宋惠蓮は「貴方は私に髻髻をつくることを承諾したのに、なぜまだ作ってくれないのかしら……ただ私に一日中この髪で作った殻を被らせているの。」と西門慶に頼んでいるように、髻髻の素材は金であるうが、銀であろうが、いずれにせよ、頭髪で作った髻髻より女性は憧れていたのである。

また「簪」、「梳」、「臥兔」、「箍」、「貼飛金」、「翠雲子網兒」などのマゲに被せた髻髻に付けた飾りは、髻髻を固定することと、装飾性を高めることだけではなく、その女性の社会地位や経済力の豊かさも表している。

三・二・四 時様扭心髻髻^{ジョウサマニウシンテキケイ}

・王六兒（四二）「…頭に流行りの髻髻をつけ…」

『金瓶梅』全編において、ここ一カ所しか描かれなかった「時様扭心髻髻」は、王六兒が付けた。王六兒は、西門慶の糸店の番頭である韓国道の妻で、のち西門慶と姦通した（第三十七回）。この場面は、小正月の上元節で、王六兒は紫の上着とそれに白い絹のスカートと合わせ、ヒールが低い緑色の靴を履いている。更に化粧も薄く、「時様扭心髻髻」を被り、金色の羊皮で作ったカチューシャ（羊皮金箍兒）を固定していて、普通の人の着こなし（中人打扮）の装いと小説は書いている。「扭心髻髻」に「時様」を付け、小説が描かれた時代においてはかなり大流行していたと考えられる。しかし彼女のこのような着こなしは、西門慶の家まで呼ばれた二人の遊女（董嬌兒・韓玉釧）に笑いものにされた。「客座贅語」巻九服飾で前述のように、「すでに流行している時に、（流行に

乗り遅れた・筆者補足) 民衆がこれを美しいと思って、流行しているものを皆身に付けても、流行に敏感を人々を覆って笑わない人はいない。⁽²⁰⁾ (前述参照) 少なくとも王六兎のこのような嗜好は、小説に描かれた当時の社会において、流行に遅れたことで笑われたのである。

三・三 出土文物による鬚髻

いかなるものも、時間が過ぎると共に外見や使い方に変化が起きる。鬚髻も同じく、最初の髪で結い上げたマゲの形から、マゲの上に被せる髪飾りに変わっていった。近年、続々発見された金や銀の素材で作った鬚髻の出土文物によって、われわれは実際に鬚髻を見ることが出来るようになった。表二は、筆者がいままで出版された資料に基づいてまとめたものである。

いままで出土した鬚髻は、すべて上下二つの部分に分けられていて、上部は結い上げたマゲに被せ、下部は頭にとめる。しかし、鬚髻の上の部分は表二のように三つのスタイルに分かれる。

その一の「細長い」スタイルでは、マゲを被せる部分は、下が広く上が狭くなる円錐形をなす。その二の「丸くて短い」スタイルでは、マゲを被せる部分は、より低く短い円錐台のようである。その三の「時様扭心鬚髻」は、マゲに被せる下の部分は、やや小さくて円錐形である。そして上の部分が正面から後ろにぐるりと巻いたように、両側に金の針金とその巻いた形状に沿って、螺旋状のように曲げられていく。

そして表二から、出土した鬚髻の地域分布は皆デルタ地域にあるといえる。これは偶然であるか、或いは当時においてその辺りだけで付けられた髪飾りであろう。またその推定された時代からみると、ほぼ嘉靖年間から流行してきたものである。これにより万曆中期と推定された『金瓶梅』の成書年代⁽²¹⁾まで、既婚女性に対して重要な

表二・出土文物による髻髻

金		銀		素材
栖霞山	浙江・義烏・青口卿	無錫	上海・浦東	江蘇・無錫・陶店橋
嘉靖三十七年 吳鶴山の妻である金氏の墳墓	嘉靖三十七年 吳鶴山の妻である金氏の墳墓	明の墳墓	万暦間 陸氏の墳墓	万暦三年 華復誠の妻である曹氏の墳墓
高さ九二〇 時様扭心髻髻 正面には金のはり で牡丹の花の模様を絡めている	高さ六五〇 丸くて短い	高さ八五〇 時様扭心髻髻	高さ一三五〇 細長い	高さ九〇〇 細長い
南京博物院珍藏系列『金銀器』・上海古籍出版社一九九九年	吳高彬『江義烏明代金冠』・『收藏家』一九九七年第六期	『無錫文博』一九九五年第一期	上海博物館『上海浦東明陸氏墓記述』・『考古』一九八五年第六期 武進市博物館『武進明代王洛家族墓』・『東南文化』一九九九年第二期 何民華『上海李惠利中学明代墓群發掘簡報』・『東南文化』一九九九年第六期	無錫市博物館『江蘇無錫明華復誠夫婦墓發掘簡報』・『文物資料叢刊』一九七八年第二集

発行刊物

髪飾りであることが明らかになった。

四 『金瓶梅』に表わされた冠

冠は髻髻と同様に、結い上がった髪を固定するもう一つのもので、それも小説の中に表現されている。宋から王室の代表的な頭に付ける飾りである冠は、女性に礼服と合わせ付けることと規定している。

『宋史』（中華書局 一九七七）志第一百四・輿服三では、

皇后の髪飾りで、花模様の簪は十二本、小花の数は大花と同じで、両側に飾り付ける。そして、九つの龍と四つの鳳凰模様の冠を被る：妃の髪飾りは、花模様の簪は九本、小花の数も同じで、両側に飾り付ける。九羽の錦鶏と四つの鳳凰模様の冠を被る。：命婦の服では、花模様の冠を被って、両側に寶石の飾りをつける。⁽²²⁾

明代では、『明史』卷六十六・志第四十一・輿服二によると、

洪武三年に定められ、二羽の鳳凰と飛龍の模様がある冠。⁽²³⁾

とあるように、「鳳冠」^{ホウカン}が皇后の常服と定められていた。しかしながら、明代の半ばを過ぎてから、官僚の正室である女性、即ち官僚の正妻しか付けられず、家庭内の権力と、社会的地位を表すものである。

『客座贅語』卷四女飾では当時、女性用冠を以下のように記述している。

いま、南京女性の服飾では、一番身分が高い貴婦人は、七品夫人の着こなしで、金で作った、珍珠や翡翠で飾った冠を被っている。古くは「副」といい、または「步搖」という。その常服の着こなしの女性が髪に付けたのは、金糸や銀糸や、馬の尾の毛か、その他、紗で作った帽子を被る。冠もある。⁽²⁴⁾

明代の前半の安定や繁栄が生み出した社会は、『金瓶梅』が成立した明代の半ばから後半まで、贅沢で華やかな
しられた社会に変わった。そして、『金瓶梅』に描かれた冠を下のように表現している。

四・一 喬五太太、文嫂の「ジュウゴスライホウシユカシ叠翠宝珠冠」、キンシユクイヨウカン「金絲翠葉冠」

・ 喬五太太（四三）「：翡翠を重ねる大玉の真珠の冠を被らせていて：」

・ 林太太（六九）「：頭に金で作った枝や翡翠で作った葉の冠を被らせていて：」

喬五太太は世襲指揮官の身分であり、皇族である喬五の正妻として、上質な翡翠を重ね、さらに大きな真珠を
つけた皇室御用の冠（叠翠宝珠冠）を被せている。また、林氏は招宣府太原節度使弼陽郡王の長男王乾の正妻で
あって、王乾は牧馬所掌印正千戸である。故に林太太はここに描かれたような、葉の形にした翡翠を付けた金の
冠（金絲翠葉冠）を被らせていたのだ。このような宝石や真珠で盛り付けた冠の外見を探るために、小論は明末
清初に徽州（今の安徽省、長江の南にある都会）で盛んであった徽州容像の中に、画かれた貴婦人の絵図を参照
したい。

徽州容像とは、明代徽州人の肖像画に対する呼称である。徽州の商人は「故郷に錦を飾る」と、「今まで頑張っ
た名譽を以って祖先の名を上げる」（光宗耀祖）という觀念を持っていて、成功してある容像を書いてもらおうとい
う風習が解放前まで長らく続いた。徽州容像は南宋から始まり、明の万曆（一五七三～一六二〇）から清の乾隆
（一七三六～一七九五）までとりわけ盛んであったと言われる。²⁵

『徽州容像芸術』の中の「中山儒人汪氏容像」（図1）に描かれている貴婦人は皇帝から授かった真赤な斗牛模様
の補子²⁷が縫いとられている礼服を着て、それにあわせて被る冠は、下から上まで、翡翠で作った如意形の雲の飾

りが重ねて並んでいて、また真珠で作られた花の模様の飾りがその上に重ねられている。これは『金瓶梅』に描かれた喬五太太の着こなしや、その皇室御用である「蝋翠宝珠冠」の外見と相似するであろう。

また「何道享夫婦容像」(図2)の右に描かれた何道享は、真赤な白鷗補子²⁸が付いている円領の官服を着て、黒い紗で作られた官帽子を被っている。彼の隣に描かれた正妻と見られる貴婦人は、彼と同じく白鷗補子を縫いどつた緑の礼服を着て、それに合わせた冠は、金で作られた冠の骨組に、翡翠で如意形の雲模様の飾りや、紅い宝石で華やかにした冠を被っている。もし、その雲の模様を葉の形にしたら、これこそは林太太の「金絲翠葉冠」であらう。

今日、出土文物の中に貴婦人の冠の実物は出ていないが、明代における皇后の鳳冠がいくつか発見されている。しかし、皇后の冠は『金瓶梅』の中に描かれないかなる冠とも階級的に外れているから、小論では例として挙げない。

四・二 吳月娘、玉樓の金梁冠^{キンリョウカン}

・ 吳月娘(七五)「…白い縮緬の紗で飾った金の梁冠を被らせていて、ラッコの革の抹額をしめ、真珠のカチューシャをはめていて…」

・ 吳月娘(七八)「…頭に翡翠や白い縮緬の紗を飾った金の梁冠を被らせて、ラッコの革の抹額をしめ…」

・ 孟玉樓(九一)「…金の梁冠を被らせていて、真珠や翡翠の飾りを満遍なくつけていて…」

・ 吳月娘(九六)「…頭に五梁冠を被らせていて、金や翡翠の飾りを控えめに飾っていて…」

ここに表わされていた「金梁冠」、「五梁冠」とは、通称梁冠である。梁は冠の表面に作られた尾根のような縦



図1 「中山儒人汪氏容像」

図2 「何道享夫婦容像」



筋である。また『隋書』（中華書局 一九七三）
礼儀志七で、「梁が貴賤を分けるのは、漢から
始まる。」（梁別貴賤、自漢始也）とあり、さ
らに『旧唐書』（中華書局 一九七五）輿服志
が「三品以上は三梁で、五品以上は二梁であ
る」（三品以上三梁、五品以上二梁）と示した。
即ち梁冠は、冠に縦筋を張るので梁と呼び、
そして被る人の社会地位によって、梁の本数
を決めたのである。

西門慶は副千戸から千戸に位が昇格したこ
とによって、妻の呉月娘が「金梁冠」や「五
梁冠」を被ることができるようになった。孟
玉楼は西門慶が死んだ後に、浙江省嚴州の通
判である李昌期の息子李拱壁と再婚した。彼
女は李家で彼の二番目の妻として「金梁冠」
を被らせることができた。

とはいえ、考古により出土文物の梁冠は、
引退した男性ものの方が多かったのである。

付録表三は、『明代首飾冠服』⁽²⁹⁾を根拠にしてまとめたものである。

表三を見ると、南京の出土文物による五つの梁冠の中に、女性用の梁冠は一つしか得られなかったことがわかる。また『徽州容像芸術』に収録された「無款夫婦容像」では、その絵の右側にいる男性に東坡巾⁽³⁰⁾を被らせ、身に白い直綴⁽³¹⁾を着せて、となりにいる夫人には金の五梁冠(図3)を被らせていて、身に緋色の団衫⁽³²⁾を着せている。この絵図から、明代において、社会地位の高い北方地域の女性は礼服と合わせた被り物として梁冠があることを明示している。これで、『金瓶梅』の中で、西門慶が昇進してから、呉月娘も彼の正夫人として、正式な場で「金梁冠」を被るようになったのがわかる。孟玉楼は再婚した日に「金梁冠」も被ったが、これは彼女が嫁ぐ際に着ている礼服と、あわせた梁冠であったと思われる。

四・三 春梅の「冠」や「珠翠鳳冠」

・春梅(八九)「…頭に冠を被らせていて、真珠や翡翠の飾りを満遍なくつけて、鳳凰の形をした簪を斜めにさしていて…」

・春梅(九七)「…真珠や翡翠で作られた鳳凰を飾っている冠…」

『金瓶梅』の中で、春梅は潘金蓮の付き人から夫人の身分に昇格した伝奇的な人物であった。彼女の運命は呉神仙が予測した通りに、山東都統制である周秀の正夫人となった時に、真珠や翡翠で飾った冠(珠翠鳳冠)を被らせていた。ここでは、「鳳釵」や「鳳冠」の言葉があったが、実際に鳳凰の形にした飾り物があり、また冠に付けた「鳳冠」とは、『明史』卷六十六・志第四十二・輿服二によると、皇后にのみ使用される決まりの模様である。

皇后冠服。洪武三年に定める。…その冠は、丸い囲いに翡翠を付けられ、その上に九匹の龍と四匹の鳳凰を

表三・出土文物による梁冠

名称	推定年代 墓主	場所	素材・サイズ(㎜)・特徴
金束髮冠	明 未詳	南京中華門外	金・高さ四〇〇×長さ七八〇 五梁冠であって、両端に一つずつ穴が開いてある。
銀束髮冠	明 明洪武二十一年 未詳	南京太平門外 岡子村	銀・高さ三〇〇×長さ八二〇 五梁冠であって、両端に一つずつ穴が開いてある。
琥珀束髮冠	明 明正徳十二年 徐浦墳墓	南京太平門外 板倉	琥珀・長さ六七〇×厚さ三二〇×高さ三七〇 真赤な琥珀のまるごと一つを半月に見立てた五梁冠である。両端に一つずつ穴が開いている。ついている二つの金の簪は両側から中心に向かつてさす。
金束髮冠	明 明天啓五年 沐昌祚墳墓	南京江寧殷巷	金・長さ一〇七×高さ一〇三 六梁冠であって、両端に一つずつ穴があいてある。緑の玉で作られた簪は、先端が半球であって、全体は長い円錐体である。
雑宝紋金 包髻	明 鄧府山墳墓	南京中華門外	金・直径九二〇 扁平な円形の六梁の冠に、法螺、靈芝、宝瓶、銀錠、法輪、画軸など雑宝と言われ る模様が、飛ぶ鳥や雲の模様と交じり合って排列し、その間にヒラヒラ動いている ような帯とあわせて、まるで天空に舞い上がるよう作られている。その二つの金の 簪は、先端が円珠であって、冠の両端に開いた一つの穴から向かつてさす。希少な 貴族女性用冠である。

(注：以上の図は石谷風著『徽州容像芸術』による)



図3 「無款夫婦容像・五梁冠」

飾って付けている。⁽³³⁾

とはいえ、『金瓶梅』の第八十九回には、春梅が廟で潘金蓮を祭るときに、頭に冠を被らせている。その上に真珠や翡翠の飾りをたくさんつけて（珠翠堆滿）、さらに鳳凰の形にした簪（鳳釵）をさした描写がある。また、第九十七回の中に、春梅は陳經濟の結婚式に礼服とあわせた「珠翠鳳冠」を被っていると書いてある。一方、『明史』卷六十七・志第四十三輿服三では、こう記す。

命婦冠服。：洪武五年に改定する命婦冠服。：金の雉八つ、その口に真珠で作った連珠を銜える。⁽³⁴⁾

ここに指している金雉の冠は、その外見が鳳冠と似ているので、明代の小説の中でも、よく雉冠の代わりに鳳冠と美称する。⁽³⁵⁾ その形は『徽州容像芸術』に収録した一つの「無款夫婦容像」（図4）では、その貴婦人は真赤な円領衫に玉帯を締め、その礼服に合わせて金の冠を被っている。この金の冠には、正面に三つ小さな金の雉と、両側で別々にした上下に並んだ二匹の大きめの金の雉と、計七羽の金の雉の模様にした簪を飾らせている。つまり第九十七回に描かれた春梅の着こなしは、この絵に描いた貴婦人のように、真赤な礼服に合わせた冠で、金の雉の冠であることを明示している。

以上、『金瓶梅』の中に描かれた冠を三つのスタイルに分けて述べた。さらに出土文物や、『徽州容像芸術』に載せられている当時の人物、写実的で細かく描かれた幾つかの現存する画と対照することで、『金瓶梅』に表わされた命婦や貴婦人たちの冠と、その特徴を明らかにし得たと思う。



図4 「無款夫婦容像・鳳冠」

むすび

小論は、『金瓶梅』全編の中に登場する女性たちの頭部装身具を網羅的に抽出して記録し、逐一、文献史料から出土文物や、現存している絵図までを、各々対照しながら分析した。その結果、この小説に表わされた女性の頭部装身具について、以下のようにまとめることができた。

○小説の中に表わされた女性の髪型。

まず「一窩絲杭州攢」は杭州の遊女たちから始まり、家庭内にいる結婚した女性に見られる、自己流のマゲの形である。そして「挑鳳髻」、「宝髻」は既婚の貴族女性たちの礼服に合わせるため、結び上げた派手なマゲの形である。最後の「雲絲銀髻」、「銀絲雲髻」は未婚の下女が使ったマゲの形である。

○小説の中に表わされた女性の髪飾りである髻髻と冠のそれぞれとその形。

『金瓶梅』の中では女性の頭部装身具についての描写として、髻髻が一番多いことが明らかになった。そして元代の雜劇から清初に盛んに描かれた徽州容像の参照からも、髻髻は多くの貴族の女性に愛用されたことが判明した。さらに、今までの出土文物の分布状況とあわせてみると、髻髻という頭部装身具は、北方から南方まで既婚女性の間に広く流行していたことが明らかになった。また、その種類は、材質から形状まで、付けられる女性のファッションに対するセンスから、その女性の経済的状況、さらに社会における地位まで関連して明確にわかるのである。

『金瓶梅』の中で冠を被らせている女性を階級的に分けてみると、喬五太太と文嫂のような人物に、登場する

当初から「叠翠宝珠冠」や「金丝翠葉冠」を被らせていたことは、彼女たちが皇室と関係が深いことを示している。また吳月娘、孟玉樓と春梅は、ストーリーの発展によって、次第に「金梁冠」や「珠翠鳳冠」を被らせることになった。このことから、小説の背景とした明代の半ば頃に、皇后の鳳冠以外に、高官の正夫人たちにも、寶石を万遍なく付けた冠を被ることが許されていたことも判明した。

このほかに、『金瓶梅』の中に表わされた女性たちの頭部装身具に関する描写の変化から、各人物の各々が辿った運命が語られていることも明らかにできた。小説の時代背景となった明代において、もしその女性の属する社会的地位を、何らかの物質的表現として認識する場合、頭部装身具が最も顕著に現れていると思われる。こうした点でも、現代の服飾研究は、学際的研究の最も重要な分野の一つであると言えるのである。

- (1) 李秀蓮著『中国化粧史概説』(中国紡織出版社 二〇〇五)
- (2) 「かでん」額に貼り付けた真赤な花模様。
- (3) 「留都婦女衣飾、在三十年前、猶十餘年一變。迹年以來、不及二三歲、而首髻之大小高低、衣袂之寬狹修短、花鈿之樣式、渲染之顏色、鬢髮之飾、履屐之工、無不變易。當其時、衆以爲妍、及變而嚮之所妍、未有見之不掩口者。」
- (4) 『元明史料筆記叢刊』(中華書局 一九八七)
- (5) 『儀禮』士昏礼はいう「女性は結婚を許される年齢になると、簪で結い上げたマゲを固定する行事を行う。」(女子許嫁、笄而礼之。)また、『穀梁伝』文公十二年(BC六一五)はいう「女性は十五才からお嫁ぐことを許す。」(女子十五而許嫁。)
- (6) 施擘著「服飾描写在『金瓶梅』中的作用」(『上海師範大學學報』哲学・社会学版 第二一九卷 二〇〇二年第二期)

- (7) 「今留都婦女之飾：有Y髻、有雲髻、俗或曰「假髻」。制始於漢晉之大手髻、鄭玄之所謂「假紒」、唐人之所謂「義髻」也。」
- (8) 律令制で、五位以上の女官、また五位以上の官人の妻の称。前者を内命婦、後者を外命婦という。
- (9) 『古漢語大詞典』（上海辭書出版社 二〇〇〇）
- (10) 孫機著「明代的束髮冠、髻髻与頭面」（『文物』二〇〇一・七 文物出版社 北京）
- (11) 「宮中女樂冠服。洪武三年定制。凡宮中供奉女樂、奉鬻等官妻、本色髻髻。」
- (12) ここでは、万曆二十年（一五九二）金陵世德堂版本、また『新刻出像官板大字西游記』と称する。
- (13) 脈望館は趙琦美の書齋の名。彼の元明雜劇写本を、清初の錢曾が『也是園書目』に収録した。故に『也是園書目』とも称する。その後、一九三八年到北京図書館の蔵書となった。次に商務印書館は百四十四種を選出して、『弧本元明雜劇』として出版した。一九五七年に原著三十二冊を四冊にして中国戲劇出版社より再版した。
- (14) 登場人物の服飾、化粧や、演技するために手に持つ道具の総称である（宋俊華著『中国古代戲劇服飾研究』広東高等教育出版社 二〇〇三）。
- (15) ここの「頭面」では、髻髻を固定する簪や、イヤリング、ネックレスがセットであることを指す。
- (16) 「今留都婦女之飾：其常服戴於髮者、或以金銀絲、或馬尾、或以紗帽之。」
- (17) 「今留都婦女之飾、在首後：以鉄絲織為圈、外編以髮、高視髻之半、罩于髻、而以簪縉之、名曰鼓。」
- (18) ……裝著排草玫瑰花肚兜：第八回
- (19) 「你許我編髻髻、怎的還不替我編：只教我成日戴這頭髮殼子。」
- (20) 「當其時、衆以爲妍、及變而嚮之所妍、未有見之不掩口者。」

- (21) 小野忍日本語訳本『金瓶梅詞話』(大安書店 一九六三)の序文による。
- (22) 「皇后首飾花十二株、小花如大花之數、并兩博髻。冠飾以九龍四鳳：妃首飾花九株、小花同、并兩博髻、冠飾以九翬、四鳳：命婦服。花釵冠、皆施兩博髻、宝釧飾。」
- (23) 「洪武三年定、双鳳翹龍冠。」
- (24) 「今留都婦女之飾、在首者翟冠七品命婦之服、古謂之「副」、又曰「步搖」。其常服戴於髮者、或以金銀絲、或馬尾、或以紗帽之。有冠。」
- (25) 石谷風著『徽州容像芸術』(安徽美術出版社 二〇〇一)
- (26) 斗牛は二十四星座のひとつである。斗牛模様は龍の形にして、牛の角が龍の頭に付けられた吉祥模様である。
- (27) 補子は明代において、『明史』卷六十七・志第四十三・輿服三に法定した官吏や彼らの夫人を等級で区別し、官服の正面に縫いつけた標識である。
- (28) 白鷗補子は文官の官位五品を指す。
- (29) 南京市博物館編纂『明代首飾冠服』(科学出版社 二〇〇一)
- (30) 二層の黒い紗で作られた頭巾である。宋代から男性の知識人の間に流行っていた頭巾である(周汛・高春明撰『中国衣冠服飾大辞典』上海辞書出版社 一九九六)
- (31) 宋代から元代にかけて、知識人男性の普段着である。また「道袍」とも俗称する(『中国衣冠服飾大辞典』前掲)
- (32) 元代における、北方地域に居住する漢民族女性の礼服を指す。明代になると、皇后や命婦の普段着であり、庶民の女性にとっては礼服である。(『中国衣冠服飾大辞典』前掲)
- (33) 「皇后冠服。洪武三年定。：其冠、圓框冒以翡翠、上飾九龍四鳳。」

〔34〕 「命婦冠服。：洪武五年更定品官命婦冠服。：金銜八、口銜珠結。」

〔35〕 『中国衣冠服飾大辞典』（前掲）

（二〇〇七年六月二十二日の審査を経て、二〇〇八年三月二〇日掲載決定）

（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

〔要旨〕

『金瓶梅詞話』に表された明代女性の頭部装身具に関して

張 紅琳

明代の代表的市井小説である『金瓶梅詞話』は、あらゆる階層の人物が登場し、実社会そのものを反映しており重要な服飾研究資料として利用できるものといえよう。小論では『金瓶梅詞話』の中に表された明代女性のマゲの形、鬚髻、冠を中心にそれぞれ素材、形状と色彩を描いた部分を抽出して、当時の女性たちの髪型とその髪飾りを論じる。また、元明雜劇の写本である『弧本元明雜劇』の「穿関」に記述された、役者が扮装するときを用いる鬚髻と、明代徽州人の肖像画である徽州容像に描かれた女性の冠を取り挙げて、『金瓶梅詞話』に表された明代女性の頭部装身具の真の意義を解き明かす。それは、中国古来の習慣で、もしその女性の属する社会的地位を、何らかの物質的表現として認識する場合、頭部装身具が最も顕著に表していると思われるからである。